

ため息の数だけ…

目次

子供の数だけ？	455
幸せの数だけ…	401
想いの数だけ…	381
夜の数だけ…	89
ため息の数だけ…	5

ため息の数だけ…

ため息の数だけ… (奈津美)

1

わたしは強い女。

仕事も出来て、一人で生きていけるはず。

もう、何年もそうやってきた。

これからもずっとそうしていくつもりだった。

なのに……

「はあ、疲れた……やっぱ歳かな？」

ここ数日、身体がだるかった。世間じやインフルエンザが流行してるけど、風邪だな

んととんでもない。仕事柄いつも元気でいなくっちゃ売り上げに響いてしまう。たぶん
ちよっとしたストレス、仕事のしすぎだろう。

——深沢奈津美、三十二歳。健康食品会社の営業ウーマン、成績はいつもトップクラス。
しゃきしゃきした性格で、自分でもよく気が付く方だと思う。明るく前向きな性格が
幸いしたのか、営業成績も上々で取引先からの評判もいい。けれど、デキルと思わせる
その雰囲気は営業の役には立っても、女性としてはまったく役立っていないと思う。

誰と付き合っても皆、仕事一筋のわたしから離れていく。

別れの言葉はいつも同じ……

『君には仕事があるから』

そう言っただけで家庭に収まる穏やかな女性を選んでいく。

寂しいと思ったこともある。けれど仕事に認められだしてからは、だんだん気になら
なくなっていく。結婚して仕事を辞めてもいいと思えるほど、夢中になれる相手に出
会わなかったからかもしれない、プライドが高すぎたのかもしれない。けれど、今ま
で付き合った男性が女性に求めていたのは、安らぎだったり家庭を守ってくれることだ
ったりと、結局は自分のためになる女性が欲しいだけだったからしょうがない。わたし
は相手のために仕事を辞める気もなかったし、男にとって都合のいい相手になる気もな
かった。

大学卒業前に事故で両親を亡くしたわたしは、それ以来誰にも頼らず自分の力で生きてきた。幸いなことに、もう未成年じゃなかったから住むところには困らなかつたし、就職も決まっていたから生活にも困りはしなかつた。住んでたマンションのローンと相続税も、生命保険で支払いを完済させることが出来た。

頼れるのは自分しかない。それ以来ずつと気を張り続けてきた。

それでも付き合った相手がいなかったわけじゃない。

最初の彼とは、何もなまま相手の心変わりですぐに別れた。

でも二番目の彼とは長く付き合っていたから、いつか結婚するものだと思っていた。なのに、親のいないわたしとの結婚は端から考えていなかっただけで、他の女と結婚するからとあっけなく捨てられた。結婚相手は親の薦めるいいところのお嬢さんで、わたしとは愛人としてなら続けてもいいだなんてバカにされたものだ。

おかげさまで、それ以来わたしは恋愛よりも仕事優先。ほんと、目覚めさせてくれてありがとうだわ。その後どんな人と付き合っても依存することはなくなつた。自分自分で守るモノ。そのことにもっと早く気付くべきだったわね。

——だから、このままでいいと思っていた……なのに、こんなにもため息が出てしまうのはなぜだろう？

「深沢先輩？」

声をかけられて急いで目を開けた。ここは営業回りの車中で、寒さしよの暖房が効きすぎてたせいか、軽くうたた寝してしまつたようだ。

「じめんなさい、ちょっと寝てしまつたみたい。三谷くん、道は大丈夫？」

営業車にナビは付いてないけど、このコースは自分の担当地区なので道はだいたい頭に入っている。わたしがしつかり案内しなきゃいけないのに、寝てちゃだめじゃない！ 運転しているのは三谷浩輔、今年の春入社してきた新入社員で若手のホープ。入社試験の成績もトップだったらしい。半年の研修期間を終えて、何人かの指導員について営業のお勉強中つところだ。わたしで三人目かな？ 若いのに礼儀作法がきちんとしていて、見た目も好感度が高い。好感度が高いというのは、営業にはかなりプラスになる。整った顔に知的な眼鏡。笑顔も爽やかで態度もなかなか落ち着いているし、言動もしっかりしていてやる気もある。覚えも飲み込みも早いほうだから、指導は楽させてもらっていると思う。特別問題もなく、そろそろ彼にも担当区域を与えてもいいかなと上と話して、わたしの持つてる担当を半分渡すことになつていた。もともとわたしが一人

で回るには担当範囲が広すぎた。ただ、なかなか担当交代を容認してくれない頑固な店が多いため、慣らしで一緒に回っている最中だ。

彼なら大丈夫だと思う。ゆっくり人の話を聞けるし、やたらお年寄り受けするからね。これって営業にとつてもすごく有利。うちが扱ってる健康食品のヘビューザーはお年寄りが多いし、またそれを販売する店主側も高齢化してるから。

あまりにお年寄りへの受け答えが上手いので聞いてみたら、両親が共働きだったため、祖父母に育てられたという。言われてみれば領けるところはたくさんあった。本当にイマドキの子にしては珍しく礼儀正しいし、お箸の使い方も綺麗なものの。

「この道、しばらく真つ直ぐでしたよね？ 先輩はもう少し休まれてもいいですよ。ちゃんと目的地までお連れしますから」

そう爽やかに笑ってみせる笑顔、銀のハーフフレーム眼鏡の奥の目が細くなる。こうやって車で一緒にいるとよく観察出来るんだけど、近くで見てもやっぱりいい顔してるのよね。切れ長の目なんだけど微妙に上がってなくて優しい雰囲気だし、睫毛も長く男のクセに羨ましいくらい。背もかなり高いし、細身だけど結構筋肉が付いているわね。肩幅があるから華奢な感じはしなくて、すごくスーツが似合うもの。何か運動してたのかしら？ 言葉遣いが完璧敬語なので、もうちょっと普通でいいわよって言ったら『先輩にタメ口は利けません』って返してきたから、きつと体育会系ね。

こんな余裕の観察が出来るのも年の功かな。若すぎて対象外っていうのもあるけれども、総務や受付の子達みたいになりふり構わず自己アピールなんて到底出来そうにない。あの子達見てたら自分も歳取ったなと思うわ。あんなに恋愛や結婚に一生懸命になれる時期はもう通り過ぎてしまったから。

それに、いくらイイ男でもこれだけ若ければ、先輩として後輩の成長を見守る気持ちの方が強くなる。自分の指導した子が、いい成績出せるようになったら嬉しいし。指導員冥利に尽きるじゃない？ 出世して本社に戻ってきた時に『あの時はお世話になりました』なんて言われたら気持ちよさそう。その点では三谷くんは合格点、間違いなくこの子は伸びると思うのよね。人に好かれるっていうのは営業の大前提だから。

「お疲れじゃないんですか？ 先輩の受け持ち範囲って街中から田舎まで結構広いですよね。一県まるまるって無理があると思うんですけど。特にこの県は海あり山ありですからね」

だからその半分をあなたに担当してもらおうつもりなんだけど、それはまだ本人には伝えていない。上司にも、お得意さんの反応を見てから何処どこから何処まで担当を渡すかを決めて報告するように言われている。

山間部を走る田舎道。高速ばかり使ってられないのは、途中で点在する取引先のお店に立ち寄るからだ。帰りは高速を使えば何とか本社に辿りつけるといふ、いつもなが

ら無謀な強行軍。

「君こそ眠くなったりしない？ 横で寝ちゃったりしたら余計眠くなるでしょう？」

「うゝん、僕は車の運転するのが好きだから苦にはならないですよ。学生時代もずっと乗ってましたし。それよりも先輩が隣で寝てらっしゃるのを見てると、信頼されるのかなあつて嬉しくなりますね」

にこつと笑うとそれがまた強烈に爽やか……イケナイ感情が芽生えてしまいそうなほど魅力的だわ。女の子達が騒ぐのも無理ないかな？

「三谷くんの運転は落ち着いてるから、ハラハラしなくていいわね。君の二個上の長野くんが入りたての頃なんて、免許取りたてで隣に乗ってるのはそりやもう怖かったから」彼の運転は本当に酷かった。運転の途中で意識を飛ばすし、安全確認は忘るし、おこたなに高速はやたら飛ばすんだから。今じゃ電車で移動出来る街中心に回らせてるけど、それが正解だったと思う。

けれど、わたしって付き合ってる彼氏の車でも落ち着けなかった口なのよね。自分が普段営業で車乗り回してるもんだから、休日ドライバーの彼氏の運転なんて違う意味で緊張しまくってたわ。まあ、若い時の話だけれども。

「そのコンビニで休憩しましょうか？ この先お店なくなるし、お昼買って車で食べましょう」

三谷くんは余裕の動作で駐車場に車を入れる。バックさせる時にさりげなく左手が助手席に掛けられて、少しだけドキッとした。そんなしぐさに若くても男を感じてしまうなんて……三十歳過ぎてからは男作るのも面倒になっちゃったから、欲求不満なのかしら？ そう思われぬように努めて平静を装うわたし。ちよつとバカみたい……十歳も下の子に男感じてどうするのよ？ いくらジャニーズ系が流行りつていったって、同級生で最初に結婚した子なんて、もう中学生の子供がいるのよ？ ああ、またため息が出てしまう。

ため息の理由——年齢。

感じてしまうのよね、こうやって若い子と組まされると。自分がおばさんに見えないように取り繕つくろつてもみるけれども、たいてい無駄に終わってしまうから。

「先輩って、喫茶店とかあまり好きじゃないですよね？」

「えっ、だって時間がもつたじゃないじゃない？ コンビニで買えば安くつくし、時間も短縮出来るわよ」

車の中で並んで食事する。並んていってても運転席と助手席だけど、やたら近い気が

するのは運転してないからかな？

「昔なんて、田舎にこんなお店なかったから、家でお弁当こしらえてきて、おにぎり食べながら運転したものよ。少しでも多くのお店を回りたいからね」

田舎に行けば行くほど、喫茶店でも食堂でも当たり前外れが大きくなる。あつたと思えばなくなってるし、いつもの調子で入って行って怖い目に遭ったこともある。それ以来、よほど安心出来るところ以外はこうやって車の中で食事を取ることが多い。昔はこんなコンビニみたいなお店も街道沿いに少なくて、おにぎり持参してなきや食いつぱぐれた。

「へえ、それいいですね。今度このコース回る時、作ってきてくださいよ。是非僕の分もお願ひします！ それだったら、ドライブかピクニックみたいで単調な田舎道の運転も楽しくなりますね」

「もう、そんなわたしにじゃなくて彼女にでも作ってもらいなさいよ。三谷くん、総務の女の子達にも人気あるから。頼めばすっごく豪華なの作ってくれるわよ」

ちよっぴりときめいたのを隠しながら切り返す。それじゃまるでデートじゃない？ つて思ったことはナイショだ。でも、こんなことをさらつて言つてのけるなんて、相当モテるだろうね。

「そんな、僕は今彼女いませんよ。それに総務の子達つてけたたましくって苦手なんです。すぐに噂話の餌食えしじょにされそうで怖いです。出来れば僕は先輩の作ったおにぎりが食べてみたいな。先輩のことだから、何か普通のおにぎりつて感じしないですよね。すぐおいしいそうだし」

「どいう意味よ、もう。そりゃ具も全部中に入れたお弁当おにぎりだから手早く食べれていいわよ。そのかわり一個がこんなに大きいわよ」

手で形を作つて大きさを見せる。わたしは手が大きい方なので、おにぎりがやたら大きくなるのだ。

「やっぱりね、そんな感じしたんですよ。そういうのっていいな」

今日は何だかいつもの敬語オンリーじゃなくなつてきてない？ まあ、いいけどね。

車中での食事をさっさと済ませると、余分に買ってきたコーヒーを彼に渡しながら急いで車を出すように言った。あんまりゆっくりしていると今日の予定が回りきれないから。

「とりあえず今日中に帰れるように頑張つて回りましょう」

「やばいですね、先輩」

「ほんとだ、どうしよう？ 最後のお店は、わたしが一番お世話になってるとこのよ。田舎の小さいお店なんだけど、結構売り上げがコンスタントにあるから、今月中に回っておきたかったのよね……でも、こんなに降りだすなら先に回ってればよかったわ」

寒いと思っていたら山を一つ越える間に雪が降りだして、あたりが暗くなるにつれて深々と降り積もりはじめた。すでもう十cmは積もってるだろう。もうしばらく大丈夫だろうと走り続けたが、さすがに峠の有料道路ではチェーンを巻かなければならなかった。

「スキーで慣れてますから、先輩は車の中にいてください」

三谷くんはそう言ってくれたけど、一緒に外に出て作業してるのを見ていた。手伝うって言ったのに、『男の仕事です』なんて言って……余裕かましますよ、年下のくせに。「とにかく最後の取引先に急ぎましょう」

雪のせいか、あたりが暗くなってしまい、まだ五時過ぎだというのにすっかり夜の雰囲気だった。

夜に降る雪を車の中やホテルの窓から見るのが好きなんだよね。つい意識を飛ばしてぼろっと見てしまっていた。

「先輩、次の道を左折ですよね？」

「えっ、ああ、そうよ。わかりやすいと思うけど、橋を越えて真っ直ぐのつきあたりを左。看板でてると思うんだけど」

「ああ、ありました。ここですよ」

車を止めて、田舎の何でも屋風情の店に飛び込む。ここは葉や雑貨、何でも置いてあるこの町のよろず屋なのだ。

「おばちゃん、こんばんは。ヘルスフーズ・サンハニーマの深沢です」

奥の部屋に向かって呼ぶと、ちよっと背の縮まったおばあさんが出てくる。

「あらま、なっちゃん、こんな天気の日にとした？ 寒かったらうに……うん？ お連れさんかね？」

「ええ、新人の三谷です」

彼もそつなく名刺を渡してみせるが、わたしが取引先の店主をおばちゃん呼ばわりす

るし、その相手がわたしのことを可愛らしく『なっちゃん』なんて呼ものだから、随分面喰らっているようだった。

「先輩、ここって……」

「ん、ごめん。社には内緒にして欲しいんだけど、ここのおばちゃんにはよく可愛がってもらってるのよ。息子さんが同じ年らしくって、来るといつも娘扱いなの。馴れ合うのはあんまりよくないことなんだけど、ここだけはね」

わたしが薦めるものは全部信じてくれるおばちゃん。親戚や町の人にも一生懸命薦めてくれて、またそれが続いているのでこの売り上げはこの地区では一番だ。

「僕は構わないです。だから先輩もいつでもおりに振舞ってください」

ありがたい言葉だ。おばちゃんに勧められるままに座敷に上げられる。三谷くんも一緒にだ。

「まあ、温まりなさいな。かす汁炊いたとこだから食べていかんか？」

「うん、そうしたいとこだけこの雪でしょ？ 帰れるうちに帰らないとね。後輩もいることだから……ごめんね、おばちゃん」

「そうか、残念だねえ」

コタツにあたって、一とおり新商品の紹介と営業をすませる。あつたかい生姜湯しょうがゆをこ馳走になりながら。

このおばちゃんには本当にお世話になっていた。男と別れてちよつと泣きが入った時に見事に見透かされて、泊まっていきなさいと言われた。その晩一緒にご飯食べて晩酌して、心の中の鬱憤うづみんを洗いざらい吐き出させてくれた。誰かが心配してくれる、話を聞いてくれる人がいるだけで、心が随分と違うのだ。友達でもなく、身内でもない、だけどあつたかくて……家族がいらないわたしにとつてとても大事な存在なのだ。

「じゃあ、そろそろ帰らないとね」

それでもしばらくは和んなごでしまった。三谷くんもすっかり馴染んで、おばちゃんにも随分気に入られたようだ。ここも彼の担当になるのでそれでいいんだけど、わたしが寂しいのかな？

「エンジン温めてきますね」

三谷くんが出て行ったので、少しだけおばちゃんと話してた。

「今度の新人さんはいい子だねえ。若いんだろうけど落ち着いてて、なっちゃんと並んでも見劣りしないよ」

「もう、おばちゃん何言ってるのよ、あっちが可哀想でしょ？ わたしの方が十歳も上

なのに一緒にされちゃ」

「けど何ていうのかね、よく似た雰囲気持ってるよ、あんた達」

そうかしらと笑ってみせるけど、実はわたしもそう感じてた。波長が合うっていうの

かしら？ まあ姉弟つってとこだろうけれども、弟にしてはちょっと恰好良すぎるわよね。「先輩、大変ですよ、峠が雪のため封鎖されたってラジオで言ってるんですけど……道は他にあるんですか？」

大変で言うわりには落ち着いた物腰で、三谷くんが戻ってきた。「うそお！ 道、あるけどすごい九十九折つづら折の坂道でそっちの方が危険なのよ！ どうしよう……」

少し焦っておばちゃんの方を見ると、仕方ないねえって顔で見返してくる。

「まあ、あかんかったらここに泊まればいいよ。部屋は何ほでも空いとるし、息子ののでよかったら男もんの着替えもあるしねえ」

この辺に宿泊できる施設はない。それこそ峠を越えれば高速の手前にラブホテルはたくさんあるけど、そういうわけにもいかないし。

「僕は構いませんが、先輩は帰れなくても大丈夫なんですか？」

「まあ、一人暮らしたからそれは構わないんだけど……」

「さすがに僕もこの雪の中運転する自信はないですね。営業車は四駆じゃないですし……」

そう言われては無理も出来ない。

「おばちゃん、ごめん。二人お世話になります」

おばちゃんは嬉しそうに『賑やかになるね』と言って準備をはじめた。

「ごめんね、三谷くん。わたしのミスだわ。社のほうに電話しておくから。まあ明日は土曜日で会社も休みだけど、予定があつたら悪かったわね。ここ携帯の電波の入り悪いから、連絡するところがあつたらおばちゃんに電話借りてね。それと……よかつたわね。かなり気に入られたみたいよ？ ここに気に入られたら、後任せても大丈夫だと思うの。多分来月からはこのあたりの地区を君が担当することになると思うから、しつかりね」

「えっ、僕がですか？ 先輩はどうかされるんですか？ その……結婚退職とか？」
恐る恐る聞いてくる。

そっか、そんな風に思われてたんだ？ まあいつ結婚退職してもおかしくない年齢だけれども。

「ぶっ、そんなのないわよ。もう、相手もないのに結婚どころじゃないわ。わたしは仕事と結婚したのよ。この県は範囲が広いから半分って、前から課長と話して決めたのよ。わたしも空いた分、新人の教育係にまわって言われてるから」

「何だ、そうだったんですか……びっくりしました。いきなりそんなこと言うから」

「だから、今晚へましないようにってこと。おばちゃん日本酒党だから出てくるわよ。

飲まされてもボロだけは出さないようにね」

「僕、お酒は結構強いですよ。先輩が飲みすぎたらちゃんと介抱して差し上げますから」
また爽やかな笑顔を返されて、ドキッとときめいてしまった。

3

「おばちゃん、寝ましたよ」

お風呂から上がっていると、三谷くんが一人で後片付けをしていたので手伝った。

ほんとうに楽しいお酒だった。久しぶりに誰かと一緒の食事、交わされるたわいもない会話に心が癒されるって感じ。

その結果、わたしは思ったより酔いが回ってしまい、先にお風呂をもらってる間に、おばちゃんは先に休んだようだ。

「これ、雪見酒にとって置いてきましたけど?」

「まだ飲めってことね」

テーブルに用意されたお銚子と、二つのお猪口を笑ってつまんでみせた。

「じゃあ、これわたしが部屋でもらおうかな?」

あらかた済んでいた片付けを終わらせて、お銚子の載せられた小盆を手にした。

「じゃあ、僕もお風呂もらってきます」

「ん、三谷くんの着替えだっておばちゃんが浴衣を脱衣所に出してたわよ」

「浴衣ですか? 苦手なんですけどね。先輩は似合いますね、その浴衣」

「褒めても何にも出ないわよ」

わたしは笑って二階の客間に入った。三谷くんは息子さんの部屋を空けてもらっていらしい。

まだ雪は降っている。街灯に照らされて深々と降る雪が窓から見えて、なかなか素敵
な景色だ。

「おいしい……」

お銚子を傾けて自分で注いで口をつける、女一人雪見酒。柄でもないかな? けれど
もいつのまにか、こんなのが似合っちゃう歳になったんだ。何だか寂しくなってきたの
を誤魔化すように杯をあける。ここの地酒は甘口でいくらでも飲めそうなのが怖い。

「ふーっ、また酔っ払っちゃいそう」

窓枠に手を置いてもたれかかる。雪を見るのは好きだけど、ずっと見ていたら切なくな
って来る。この世にたった一人、自分しかいないんだって思い知らされて……

——ため息が、知らず知らずにもたまたま一つ。

「先輩、ちよつといいですか？」

ふすまから顔を出した三谷くんが、返事も聞かずに部屋の中へ入ってきた。

「えつ、ちよつと三谷くん？」

お風呂上がりで髪が濡れたままなのがちよつと色つばい。

「うわつ、ここすごく眺めいいじゃないですか！ 僕の部屋は隣の壁しか見えないんですよ。ちよつとだけ一緒に雪見酒させてもらつてもいいですか？」

「もう、こんな時間に女性の部屋訪ねてくるって非常識だよ？ 君らしくないわね。まあ、この雪景色に免じて許してあげるわ」

小さなテーブルのはす向かいに彼は座り込んだ。浴衣姿で胡坐をかくので、彼の素足が見えてドキツとした。袖から見える腕も筋肉質で男の人って感じがして、思わずまたドキツとしてしまう。一体何度ときめけばいいんだろう？ 十歳も下の、恋愛対象外の彼に……

少し嫌そうな顔をしながら注いでやつたが、そんなのにはお構いなしに返杯でわたしのお猪口にお酒を注いでくれるので、仕方なしに杯を重ねていた。

「先輩、僕らしいつて……どういのがそうなんですか？」

何だか真剣な目をして聞いてくる。まさか酔つてるの？ お風呂に入つて酔いはさめたでしょうに。

「どうつて、三谷くんは若いのに常識的だし、あんまりふざけたりすることがないでしょう？ 基本的には人の嫌がることや、その人のテリトリーに無理矢理入ってきたりしないはずなもの」

「へえ、そんな風に思われてたんですか……だからこうやつて一つの部屋にいても身の危険を感じないんですね？」

「そ、そうね。あなたは信頼関係をそんなことで簡単に壊したりしないはずだから」話し方が昼間と全然違つてない？ どうしたんだらう、酔つてるのかしら？ でもお酒に強いって自分で言つてたはずなのに。

「じゃあ、先輩がどんな風に思われてるか知ってます？」

「……」

嫌な言い方だ。わたしが人気男性社員の多い営業課で、いつまでも独り身でいるものだから、総務課の女の子達からあまりよく言われてないのはわかっている。同僚だつてそう、仕事の出来すぎる女はとかく杭を打たれるもの。でも、もう打たれすぎて慣れちゃつてるんだから少々のことは平気。

「仕事の出来る女、隙がない、可愛げがない、でも嫌味もない」
 淡々と人の短所をあげつらう、これが三谷くん？　まるで昼間の彼とは別人のようだ
 った。爽やかで、礼儀正しい彼とはまるで……

「ちよっと、喧嘩売ってるの？」

「結構美人なのにあんまり飾り立てない、人の悪口、陰口は言わない。性格はさっぱり
 してて意外と涙もろい、気配り上手、病人には優しい」

「な、何それ？」

「これ全部営業課内で言われていること、プラス僕の主観です」

ようやくにつこりと笑って、いつもの彼の顔を見せてくれたのでほっとした。

「もういいわよ、酔ってるんなら部屋に戻りなさい」

だめだわ、完全に酔ってるみたい。いくらしつかりしても、やっぱり新卒の社会
 人一年目の子供なんだ。

「僕が怖いですか？」

急に低い声が頭の上で聞こえた。いつの間にかテーブルの横まで来ていた彼は、眼鏡
 を外すとテーブルに置いた。

「何言ってるの、もういい加減に……きゅっ！」

彼の手が伸びてきて、腕をつかまれ強い力で引き寄せられた。

「やめて！　何考えてるの！」

素早く彼の胸の中に収められてしまう。湯上がりの浴衣の素肌、筋肉質な胸板、そし
 て耳元に熱い吐息……

「あなたのこと考えてますよ。忘れましたか？　夏に僕が風邪ひいた時に、気をつけな
 さいって薬と栄養剤くれたの。誰にも気付かれないようにしてたのに、あなたは僕が熱
 出してるのに気が付いてくれた。誰にでもそうかもしれないけど、僕は嬉しかったんだ。
 それからずっと先輩を見てたんですよ、気が付きませんでしたか？」

「そんなの……」

両手をつかまれて開かれた胸のすぐ上に、三谷くんの顔があった。

少し怒ったような、真剣な男の人の顔をしている。いつもの可愛い後輩、爽やかな青年
 じゃなくなっていた。

「いつも気を張ってる分、気を抜くとふにやって顔になるんだ。雪を見るのが好きで、
 見るとすぐにぼーっとなるし、ため息をつくのも癖ですか？　それでもって酔いはじ
 めると目が潤んでめちゃくちゃ色っぽくなるんだ。浴衣が似合う色っぽいうなじをして
 て、意外と胸もあって、浴衣のあわせから胸の谷間が見えて僕を誘ってるみたいで」

背中を彼の指が這っていくのを感じていた。その巧みな動きに身体が反応しそうにな
 る。

——やばい……

「もう、やめなさいってば！ 三谷くん、あなた自分が何してるのかわかってるの？」
 「わかってますよ。ほんとはこんなことするつもりなかった……一緒に営業に回れたのが嬉しかっただけです。意外などこいっばい見れましたし。だけどこうして足止めくらつて一緒に食事して、お酒飲んで、浴衣姿なんか見せられたらもうだめです。こんな、僕みたいな年下の男は相手にされないと諦めてたけど……深沢先輩、今日一日僕のことめちやくちや意識してませんか？」

一瞬見透かされたような気がして焦った。

「し、してないわ、意識なんてしてないわよっ！」

「僕にすごく気を許してくれてませんか？」

「うっ……」

それはしてたかもしれない。だってほんとに信頼出来る子だって思えたんだから！
 なのに、もう……

「知らない、もう気は許せないわ！ こんなことするなんて、酔ってるんでしょ？ 今なら忘れてあげるから。ね、放して……」

彼は片手を離すと、いきなりテーブルの上のお銚子をぐいっと飲み干すようにしながら口に含んだ。

「なっ、んんっ！」

畳の上に押し倒されて、彼は片手でわたしの両手首を頭の上で束ねて押さえつけた。動けなくされて、もがいているとそのまま唇を塞がれた。それと同時に顎を押さえられ、無理矢理わたしの口を開いて舌で割り入ってきたかと思うと、甘口の日本酒を流し込んできた。

「ううんっ……うくっ」

不意のことに逆らう暇もなく、一気に飲み干してしまった。

「酔ってることにしてくれるんなら、いくらでも酔いますよ？ 深沢先輩。先輩も酔わせてさしあげますから」

「んんっ！」

何度も同じ動作を繰り返し、残っていたお酒を全部注ぎ込まれた頃には、頭がぼうっとしてしまっていた。

「先輩、綺麗ですよ、そのとろんとした顔。ほんとにそれで誘ってないつもりなんですか？ お願いですから会社でそんな顔見せないでください」

わたしの口元から流れ出たお酒を丁寧に舐め取っていく。その仕草がすごく緩慢でエロチックだった。押し倒されて無茶苦茶乱暴にされるのかと思ってたのに、全く正反対で、その手は遠慮がちで、一向にわたしの身体には触れてこようとしなかった。それが

かえって焦らされているようで、わたしは抵抗することを忘れてしまっていた。

「僕は先輩が好きです。本当に嫌だったら大きな声出して僕のこと跳ね飛ばしてください。そのくらいの力加減しますから。そうじゃなかったら、酔ってることにして僕のモノになってください」

力はもう入らなかった。大きな声を出す気も失せている。

——きつと酔ってるんだ、わたしも彼も。

どうせ十歳も離れてるんだから本気じゃないだろうし、男の人は女の人としたくなくなったら好きでなくてもそのくらいのこと言ってくるよね？ きつと彼も今、彼女がいなくて寂しいんだ。わたしも寂しかったから、だから逃げられないんだ。だから、ため息ばかりついついちゃうんだ。

今だけ、酔ったままでいいのかな？ 身体だけでも暖まれるなら……

「先輩、ほんとに、いいんですね？」

浴衣の袖そでから出た彼の綺麗な手がわたしの身体をまさぐりはじめる。

「綺麗だ……好きです、本当に……僕のモノだ、全部」

気持ちいい……きつとこれは酔ってるから、雪のせいなんだから。

呪文のようにそう繰り返すわたしの思考回路は、徐々に三谷くんの囁ささきに支配されていた。

4

「ああ……三谷くん、もう……」

わたしの声が切なく漏れる。

「先輩のココ、すごいことになってませんか？」

さつきから彼が触れてるわたしの中心は、もうトロトロに溶けてしまっている。

「やだ、そんな……んんっ！」

わたしの中の感じるところを握えると、容赦なく攻め立ててくる。それと同時に敏感になった突起を擦られるともう普通じゃいられないかった。目の前の引き締まった綺麗な筋肉のついた若い彼の身体と比べると、本当は自分の裸を見られるのすら恥ずかしくなかった。若い女の子とは肌の張りも全然違うから。だけど、今日だけだし、酔ってるから思わず大胆になって、普段より感じすぎてるんじゃないかと思う自分の身体。

「ああっん、いいっ、やあっ……もう……」

キスからはじまった彼の愛撫はすごく緩慢かんまんなスピードで、わたしを焦らしながらもゆ

つくりと感ずる部分を探し当ててきた。首筋から降りてくるキスが胸の蕾にたどり着くまで、どれほど狂わされたか……男の人を知ってる自分の身体が恨めしく思えた。だって、はだけた浴衣の胸元や、割り広げられた裾から滑り込む彼の手を期待してる自分がいるのだから。

そして期待していた以上の愛撫を与えられて狂わされていく。

ほんとに彼、わたしより十歳も下なわけ？ 信じられない……何か弄もてあそばれてるっていか、好きにされてない？ 指だけでイカされて、恥も外聞もなく欲しいとねだつてしまっそうになる。

「すごいですね、先輩のココ。イク時、僕の指めちやくちや締め付けてますよ？ こんなんじゃ僕が入ったらどうするんですか？ 今日僕何にも用意してませんからね、失敗したら大変ですよ——まさか、持ってないですよね？」

「バカ、持つてるわけじゃないでしょ！」

避妊用のゴムのことを言っているんだろうけど、彼氏もいないのに普段から持ち歩いているわけがない。

「このまま先輩の中に入れないなんてちよつと辛すぎるなあ。生殺しどころじゃないですよ、それは先輩も同じですよね、どうします？！」

いつもの爽やか系の笑顔で飄々ひょうひょうと言つてのける。でも目が笑つてないわよ？ そりゃ、

わたしもこのままじゃ辛い……

すぐく熱い目をして、じつとわたしの顔を見てる。

返事を待つてるの？

わかったわよ、もう、降参します。

——にらめっこで、わたしは負けた。

「もうすぐ生理だから……、多分、大丈夫……」

「ほんと？ いいの？ そんなこと言つたら……」

三谷くんの顔が近づいてくる。

『中に出しちゃいますよ？』

耳元でそう囁ささやく艶あざっぽい声。

どうしよう？ ゴムなしなんて実は経験ない。する前にこんなに色々愛撫されて何度もイカされたのも初めてだ。今までのわたしの男性経験って何だっただらう？

三谷くんは自分のトランクスを脱ぐと、すぐさまわたしの中心にあてがってわたしの顔を覗き込んできた。

「あ……」

だめって言えない。そんな目でじつと見ないで。

「もういい？ 早く先輩の中に入りたい……」
潤んだ男の子の目なんて初めて見たわ。思わず頷くわたしの中に、そのままゆっくりと入りかけて、止まって、焦らす。彼の引き締まった腹部が前後する度に、熱くそそり勃ったそれがわたしの濡れたソコに何度も擦りつけられるだけ。

「ああん、そんな……」

抱えられた両足を押し広げられて、彼の下で、わたしは我慢出来なくなっていく。

「先輩のココ、欲しいって言うてるのわかりますよ。そんな可愛い声出して、後で悔やんでも遅いですからね」

言い終わらないうちに、一気に奥まで貫かれた。

「ひっ、んんっ！」

一瞬意識が飛び、そして激しく突き上げられた衝撃で再び意識が戻る。

「あっ、ああん、はあっ、いいっん」

「すご、先輩、きついよ、締めすぎ！ くっ、こんなの、生でやったらもたないっ！」

彼の動きが加速する。わたしはついていけずに喘いで溺れる。

「やん、はん、もう……い、いつ、イッちゃう、ああっ！」

「くっ！ せんばい……！」

わたしの中が……彼の熱いもので満たされていった。

「先輩、大丈夫ですか？」

「だめ……もう、動けない……」

「ちよっとやりすぎたかな？」

布団の中でぐったりしてるわたしを、三谷くんが引き寄せる。終わったあと速攻で醒める男が多いけど、彼は違ったみたいだ。もともとも三回もやれば満足でしょうけど。二回目からもうすぐくっつて、長い間、狂わされた。大きな声上げないようにするのが精一杯だったし……だからすでに今から身体中ギシギシいつてるのがわかる。

若い子ってこんなにすごいものなの？ こんな、とてもじゃないけど身体がまたないわよ……

「先輩って、エッチの時すごく可愛くなるんですね。普段からすると信じられないくらい。僕より上って忘れるところでしたよ」

「ね、三谷くん、あなた年齢誤魔化したりしてない？」

「どうしてですか？ もしかして、若いから下手だとか、すぐ終わるとか思っていました？」

「それは……その、上手だったと思うけど……あ、あんなにされるなんて思わなかったから……」

三谷くんの腕の中は暖かくって、だんだん眠くなっていく。

「僕はすごくよかったです。こんなにいいなんて……先輩もすごく喜んでくれましたよね？ この調子じゃ僕なんか何度でも出来そうで……先輩？」

「……ん？」

「ね、先輩のこと、奈津美とか奈津美さんって呼んじゃだめですか？」

低めの甘い声が耳元で響くけど、エコーがかかっているみたいだった。

「だめよ、名前は……会社にはれちゃう……今夜だけ、なんだから……だめよ……」

「……ないですけどね」

最後に何か耳元で聞こえたけれども、眠くって、わたしにはもう理解出来なかった。

「先輩、深沢先輩？」

「ん？ 三谷くん……」

すごく久しぶり。誰かに起こされるまで寝てたなんて。

「おはようございます。さっきおぼちゃんがふすまの向こうから朝ごはん出来てますって言ってましたけど？」

「えっ、も、もうそんな時間なの？ 三谷くん、返事した!？」

「いえ、してないです。どうしますか?」

「どうしますって……」

布団の中は二人とも何一つ身につけていない状態。

おぼちゃんにバレてるのかな？ 昨日の雪見酒のお銚子ちょうしといい、先に寝ちゃったこと

といい、わたしの気持ちを見透かされてたような気がする。年齢差考えて気付かないふりしてたのに、いつの間にか彼のこと意識して、惹かれはじめてたのもわかっちゃったんだろうか？

「……ん？」

「あの、三谷くん……?」

「すみません、朝の生理現象ですから気にしないでください」

そう言いながら三谷くんの手、わたしの腰のあたりさわってない？ 股間の元気なものわたしに押し付けてません？

「と、とにかくこの後始末はしておくから、三谷くん部屋へ帰って着替えてきなさいね。浴衣はわたしが持って帰って洗濯してきます」

身体を起こした途端に、わたしの中から何かトロリとこぼれ落ちる。

「あ……」

「そんな色っぽい声だしちゃだめですよ」

「違うわよ、これは……」

ふわっと、彼の腕の中に抱きとめられる。さっきまで一緒に眠っていた温かなたくま

立ち読みサンプル はここまで